



No.12  
 平成7年(1995)12月1日  
 編集・発行  
 津田左右吉博士顕彰会  
 美濃加茂市島町2-5-27  
 TEL 0574-28-8551

# 尾関先生のおもいで

津田左右吉博士顕彰会会長

佐合隆治

遠くの山々に、初冠雪の便りが、聞かれるようになり、平成七年もいよいよ終りに近づいてきました。

本年度は、津田顕彰会と致しまして、津田左右吉のマ



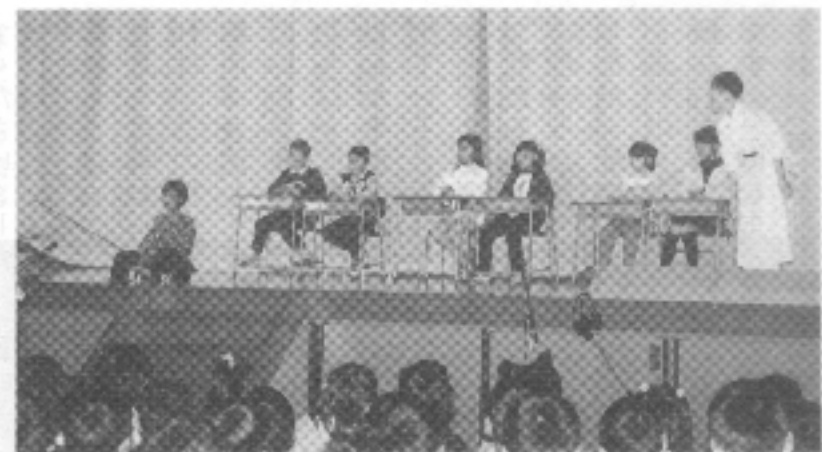
昭和35年 5月 下米田小学校

ンガ本の完成が第一のニュースであります。非常に多くの皆様方に、高い評価を頂き、本の売れゆきも順調に推移しております。今後は、この本を、津田顕彰会としても大いに利用して啓蒙活動、顕彰会活動をもりたてていきたいと思っております。しかし、会として本年は、残念なことがありました。それは、この会の生みの親とも云える、尾関公見先生の死であります。

また、下米田小学校にもお越しになり、校庭で博士の講演会を開催するなどの企画をされました。私も小学校で、子供心に聞いた、津田博士の優しい語り口の講演を今も思い出すものです。津田博士に、じかに接し、博士の人柄にほられ、その後、自他共に許す、津田博士の信奉者となられ、津田博士の逝去にあたり、津田顕彰会のもととなる研究を始められました。今日の津田顕彰会のもとをつくられました。下米田小学校における銅像造りに奔走され、津田顕彰会を磐石のものにされました。



『黄昏の人 津田左右吉』  
 本の寄付  
 六月二十三日、鈴木瑞枝先生より『黄昏の人 津田左右吉』の本を三〇八冊寄贈して



下米田小学校学習発表会で「津田左右吉物語」  
 下米田小学校  
 十一月十七日に下米田小学校の学習発表会で、四年二組のみなさんが「津田左右吉物語」を上演しました。劇では、小学校の四年生が郷土を学ぶ授業で、左右吉の一生を学習する場面ではじまりました。少年時代の左右吉や、父藤馬を着物姿で扮装し、熱演する児童たちは、とても生き生きとしていました。

いただきました。  
 鈴木先生は、幼い頃から津田博士に孫のように可愛がられてきました。津田博士に対しての思いや、人となりを紹介した本です。  
 今年の津田賞から、副賞として寄贈することになりました。  
 また、昨年十二月、鈴木先生は美濃加茂の図書館と下米田小学校(上の写真)で講演を行いました。

# 出 会 い

土屋 保

津田左右吉博士顕彰会が設立されたのは昭和五十九年二月十一日でした。早くも満十年を経過し、十一年目に入っています。その間会長をはじめ役員の方々また、多くの会



昭和59年 津田顕彰会 設立総会

員の方々の大変なご努力で県でもまれにみる顕彰活動が展開されていることに対し、先づ心から敬意を申し上げる次第であります。

私が、津田博士のお話を初めて聞いたのが、小学校三年生の時でした。当時担任の酒向先生が宿題

として、「昔から下米田出身で偉い人を一人か二人家で聞いて来るように」との話でした。はがき位の紙を一枚いただいたてきました。

私はその話を祖父にしますと、「そうか」と言って祖父がしばらく考え込んでいました。が、思い出した様に二人の名前を書いてくれました。その一人が津田博士、他の一人が渡辺万次郎兼永名匠でした。二人の名前を先生に提示しましたがその時の反応は覚えておりません。

その時祖父が話してくれました。津田さんは昔武家の子供として父から大変厳しく教育を受けられた。その父藤馬さんの話として、ある朝の藤馬さんが殿森という所の田んぼで田の草を取っていると一人の旅人が

「おじさん、比久見へ行くにはこの道でよいかな。」と聞いたそうです。

顔を上げた藤馬さんは、何も言わずに田からでて道に上がり据えてあつた帽子をかぶって、「この道を北の方へ行きなさい。」と教えたそうです。人に道を尋ねるときは帽子位はとって言葉をかけるのが本場で藤馬さんは、わざわざ帽子

をかぶって答えられたと言う話をしてくれました。そんな話を祖父から聞いて私は津田博士を知りました。

また、昭和二十六年三月のことでした。下米田青年団の活動実態調査のため文部省社会教育局から駒田錦一先生と田崎正先生の二人が来村されました。二百人近い青年団活動を調査され、森山の岩井屋で夕食をいただいたことがありました。

夜九時になり二人の先生が時間も来たので気をつけて帰りなさいと言って玄関まで送ってくださいました。その時どの先生か覚えていませんが、最後にもうひとつ聞きたい。」と私たちに尋ねられました。それは、この地域は木曾川と飛騨川が合流しているし、また低い山が東西に見える。先生たちは全国を回っているが、こんな地形の所には偉い人が出ていると思うが記憶にないかとのことでした。

私たちは大変困りました。いろいろの方々を申し上げましたが、最後に私は津田博士を思い出して、「文学博士の津田左右吉博士がこの村の出身です。」と申しますと一人の先生が、「何、早稲田大学の津田

博士か、これは日本を代表する大先生である。こんな先生を今頃思い出すようではいかなあ。」と、大変怒られたことも覚えています。

## 尾関公見先生との語らい

大澤 功

思い出すままに、尾関先生と折々に話し合った内容の一端を記してみたい。

一、昭和三十二年以前のこと—これは津田左右吉博士ご健在の頃であるが、下米田小所蔵の『儒教の実践道徳』をはじめ数冊の著書とその後小・中に送られてきた博士ご自身の書き込みのある岩波書店の本について、二人が情報交換をしたのが語らいの初めであった。その後『津田左右吉全集』発刊の折りに、「全集に寄す」を書いておられる石田幹之助先生が大学の講義の中で津田博士の「実証主義の研究」について、五十年近くも同博士と研究を共にされた体験談を基に語られたことが興味深く、尾関先生にもこの事をお話した。昭和三十二年に下米田小学

校長に赴任され「津田博士の紹介こそ自分に課せられた使命である」と考えられ、精力的に資料収集に没頭され「郷土の光―津田左右吉博士」（スライド解説書）にまとめられ、私どもを驚かされた。この資料集めに武蔵野市境の博士の家に一週間も滞在され「自分の聞きたいことは聞いた。それにも増して、日常つましやかな博士のご生活と研究とが一体になってるのをまのあたりに見て、感銘深く、人間津田左右吉の真髓に触れる思いがした。僕の愚問にも答えていただき今思うと冷や汗の出る程だ。」と。



平成4年 胸像建立記念式典  
(左：栗田直躬 早稲田大学名誉教授)

「ないか」と。このような内容を読むのは私をはじめで、恐縮して何も言えなかったことを思い出します。三、津田博士胸像建立記念誌編集の時、栗田直躬早稲田大学名誉教授（津田博士の愛弟子）の書かれた「津田左右吉」（早稲田大学）と「郷土の光津田左右吉」（尾関公見先生著）を掲

載できないかとお願ひしたところ謙虚な先生は、「三十余年も前に書いた古い原稿で記念誌の内容にふさわしくない」と固辞されたが、再三再四無理なお願ひをし、話し合いの末、漸く同意して下さいました。

## 尾関公見先生の ご逝去を悼む

西山喜洋

昭和三十五年五月十二日津田左右吉博士の美濃加茂市名誉市民推戴式が、太田小学校講堂で行われました。当日、私は太田小学校の放送部の係として、マイク調整の役目を努めました。来賓としてお見えになっていただいた公見校長先生から「ご苦労さん」と声を掛けていただいたのが最初の出会いです。

昭和五十六年八月、中日新聞の「ふるさとびと、今改めて」の欄に、津田博士の記事を書きました。

「新聞を見た」と、早速お便りをいただき、これがきっかけで顕彰会設立準備委員会の仲間になりました。昭和五十八年のことです。

昭和三十二年四月、尾関先生は下米田小学校長に就任、以後「郷土の光」津田博士の足跡を訪ね、スライドにまとめて顕彰に努められました。

平成七年三月二十四日に亡くなられるまで、三十八年間にわたって「人間津田博士」を求め



昭和35年5月 太田小学校

て東奔西走されました。その間、数限りない原稿を書かれ、多くの人々に感銘を与えられました。

顕彰会が発足し、昭和六十年、第一回の津田左右吉賞少年の作文募集が行われました。平成七年の第十一回の募集には、千点に及ぶ作文が可茂管内から出品されました。入賞者には、津田博士を描いた文鎮が贈られています。

平成六年度には、一人でも多くの子供たちに博士の偉業を伝えようと「マンガで読む郷土の偉人伝、津田左右吉物

語」が作られ、尾関先生に原稿段階で二、三度筆を入れていただきましたが、先生の手元に届かなかったのは残念でした。

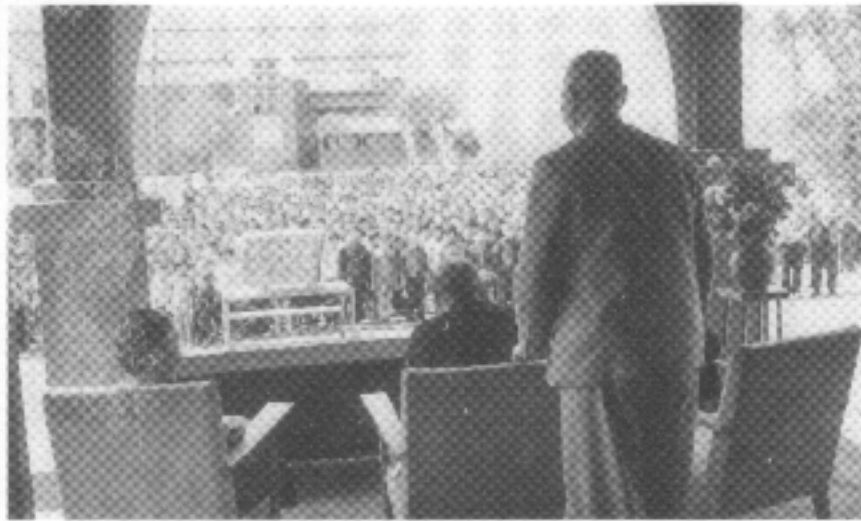
先生が心血そそがれた生誕地碑をはじめ、モニュメント、母校前庭の胸像建立等は、間違いなく子供達の心に残されている事と存じます。津田顕彰会」は、確実に郷土に根付いています。ご安心ください。

意をつくしませんが哀悼の言葉と致します。

# 「ありがとう」

佐合良平

「ありがとう。」  
ほんの一言であるが、私の心にしみ込んでいる。その響きは、春の暖かな日差しのごとく、やわらかく安らかであった。今から三十五年前。ちょうど下米田小六年生の五月だった。津田左右吉博士が奥様と我母校を訪問されたのである。同級生だった土屋光代さんが、博士に花束を手渡した時の一言である。なぜか、その光景



昭和35年5月 下米田小学校

は未だに私の小学校時代の思い出として強烈に残っている。運動場に全校集会の形態で博士の来校されるのを待ったのであるが、当時私は博士の偉大さを何ひとつ知らなかった。それは私だけではなかったであろう。博士は、お弟子の栗田直躬先生に手を支えられながら、朝礼台に上がられ、幼い私たちに話をされたのである。担任であった長谷川先生（現広見小学校長）は、8mmカメラでその様子を撮影された。しかし、博士の声は、残念ながら声量が少なく、しっかりと聞き取れなかった。一年生の時父親に連れられて、下米田小へ入学されたことと十三歳まで下米田で勉強されたことなど話されたような気がする。今から思えば、当時在籍していた私たちに比べて、あの偉大なる博士とお会いできたということが、下米田小の歴史となった。大変光栄なことである。

現在、下米田小学校では、学習発表会で、子供たちが津田博士の

物語を演じると聞く。また、津田博士顕彰会主催の作文を讀ませていただいて、私たちが以上に子供たちは研究している。先輩として、何ひとつ残せなかったことが悔やまれる。しかし、あの「ありがとう」の響きはいつまでも私たちの同窓生の心に生き続けるものと確信している。

## 第十一回

### 津田左右吉賞

十月二十八日に顕彰会が主催する第十一回少年の作文発表会が市中央公民館で行われました。発表会では、受賞者の家族や友人などの大勢の前で、発表者は堂々と自分の将来の夢を発表しました。

今回は、美濃加茂市発行の『津田左右吉物語』を讀んだことによる応募が目立ち、津田博士への関心の高まりが感じられました。

小学校五・六年の児童と中学校の生徒合せて五六七点の応募がありました。また、可茂地区に募集範囲を広げて二年目に入りますが、小学校・中学校合わせて二十四校の応募がありました。



**入賞者名簿**

● 小学校五・六年生の部

『最優秀賞』

梨の仕事を通して

山之上小六年 山田 陽介

『優秀賞』

本当の優しさを持った

人になりたい

古井小 六年 林 祐子

津田左右吉博士

山手小 六年 田辺 有紀

未来の町へ一歩ふみ出すために

下米田小五年 渡辺 奈々



『佳作』

私の友達

古井小六年 日比野きよ良

私は、こんな人になりたい

蜂屋小 六年 山崎 友美

今までの伊深町を

伊深小 六年 小林 泰子

いつまでもかわらぬふるさと三和

三和小 六年 朝日 真一

津田左右吉博士

下米田小六年 渡辺 正樹

津田左右吉物語

山手小 六年 春見 太一

私はこんな人になりたい

土田小 六年 森 麻衣

将来のわがふる里  
久田見小六年 槽谷由美子

将来の夢  
御嵩小 六年 鈴木 洋志

● 中学校の部

『最優秀賞』

将来の夢

東 中 三年 藤田真理子

『優秀賞』

「友達」とは

西 中 二年 田口絵美子

支え、支え合いながら

西 中 一年 尾石 智香

『佳作』

最高の友達

東 中 二年 渡辺 朋子

「私の将来」

双葉中 三年 井戸 陽子

将来の夢（父とともに）

双葉中 三年 長尾 光

友達の優しさ

双葉中 一年 藤田 綾

私のなりたいものは

広陵中 三年 井戸 飛鳥

将来の夢をかなえるために

広陵中 三年 大沢 恵

私の将来

広陵中 三年 五島 恵

心のふるさと

広陵中 二年 斉藤 健一

私が木なら

「こんな郷土にしたい」

坂祝中 三年 渡辺 美佳

## 尾関公見先生の ご逝去

平成七年三月二十四日に尾関公見先生が八十九才でご逝去されました。

葬儀は、肌寒い晴天の日に行われ、多くの弔問客の中、佐合会長が弔辞を述べました。尾関先生は津田博士の生前からその業績を紹介され、十一年前には、顕彰会を設立されました。

顕彰会にとって先生を亡くしたことは大きな損失となりました。心からご冥福をお祈り致します。

## 津田顕彰会への寄付

平成七年五月十四日、故尾関公見先生の夫人正子さんとご遺族の方から顕彰会へ、五十万円の寄付がありました。

心からお礼を申し上げます。いただいたご寄付は顕彰会活動に活用させていただきます。



平成7年6月、尾関家にお礼訪問

## 『マンガで読む郷土の偉人伝 津田左右吉物語』の完成



美濃加茂市では、名誉市民第一号の津田左右吉博士の偉業を紹介する『マンガで読む郷土の偉人伝 津田左右吉物語』を発行し、販売しています。

顕彰会でも購入し、津田博士の紹介のため、可茂地区の小・中学校に寄付しました。問い合わせは、美濃加茂市教育委員会文化課 ☎二八―八五五一 定価九〇〇円

## 津田博士を聞く会

下米田小学校

十月三十日に顕彰会の副会長の大澤先生が、下米田小学校の五・六年生の児童を対象に「津田左右吉博士の少年時代」と題して講演をされました。



博士の生まれた頃の下米田の状況、父藤馬より四書の素読をうけたこと、津田博士が学問への情熱を持つようになったことなどを話されました。